

水稲中生品種における育苗箱施用剤のイネ紋枯病に対する防除効果

1 情報・成果の内容

(1) 背景・目的

県産米の品質向上、作期分散等を目的として、中生品種‘きぬむすめ’の栽培面積が拡大している。中生品種は移植から出穂期までの期間が長いことから、早生品種より各種病害虫の被害を受けやすい。現在の防除体系は早生品種を主体としていることから、中生品種に適した防除体系の確立が急務となっている。そこで、重要病害であるイネ紋枯病を対象として、各種育苗箱施用剤の防除効果について検討した。

(2) 情報・成果の要約

フラメトピル剤、ペンフルフェン剤およびチフルザミド剤の各育苗箱施用は、水稲中生品種においてもイネ紋枯病に対する高い防除効果が得られる。

2 試験成果の概要

(1) フラメトピル剤の防除効果

中生品種において、フラメトピル剤の移植当日処理（50g/箱）は安定した高い紋枯病防除効果が得られた（図1）。

(2) ペンフルフェン剤およびチフルザミド剤の防除効果

ペンフルフェン剤の播種時覆土前処理（50g/箱）およびチフルザミド剤の移植当日処理（50g/箱）は、通常年では高い紋枯病防除効果が得られた。しかし、気象条件により十分な防除効果が得られない場合がある（図1）。

(3) シメコナゾール剤の防除効果

シメコナゾール剤の移植当日処理（50g/箱）は、前述の薬剤と比較してやや劣るものの、通常年では実用的な紋枯病防除効果が得られた。しかし、気象条件により、防除効果が低い場合がある（図1）。

3 利用上の留意点

(1) 本情報の普及対象は、鳥取県内の中生品種とする。

(2) 2020年1月15日現在、各有効成分を含む育苗箱施用剤は以下のとおり。

1) ペンフルフェン剤：スクラム箱粒剤、ルーチンエキスパート箱粒剤等

2) フラメトピル剤：箱維新粒剤、箱いり娘粒剤等

3) チフルザミド剤：Dr. オリゼフェルテラグレータム粒剤、ルーチンアドスピノ GT 箱粒剤等

4) シメコナゾール剤：サンエース箱粒剤、トリプルキック箱粒剤等

(3) 2017年のペンフルフェン剤、チフルザミド剤およびシメコナゾール剤の防除効果低下の原因は、6月第6半旬から7月第3半旬の気温が平年より高く経過したことにより、紋枯病の感染が早く始まったため、薬剤の効果が発現する前に病勢が進展したと考えられる。

(4) 上記のような気象条件の場合、早生品種においてもペンフルフェン剤、チフルザミド剤およびシメコナゾール剤では、十分な防除効果が得られない可能性がある。

(5) 幼穂形成期頃の発病株率が20%以上の場合、本田散布剤(バリダシン液剤、モンカットファイン粉剤20DL、モンセレン粉剤DL、リンバー粒剤等)による追加防除を行う必要がある。

(6) 薬量が不足すると防除効果が低下するため、規定量を均一に散布する。

[具体的データ]

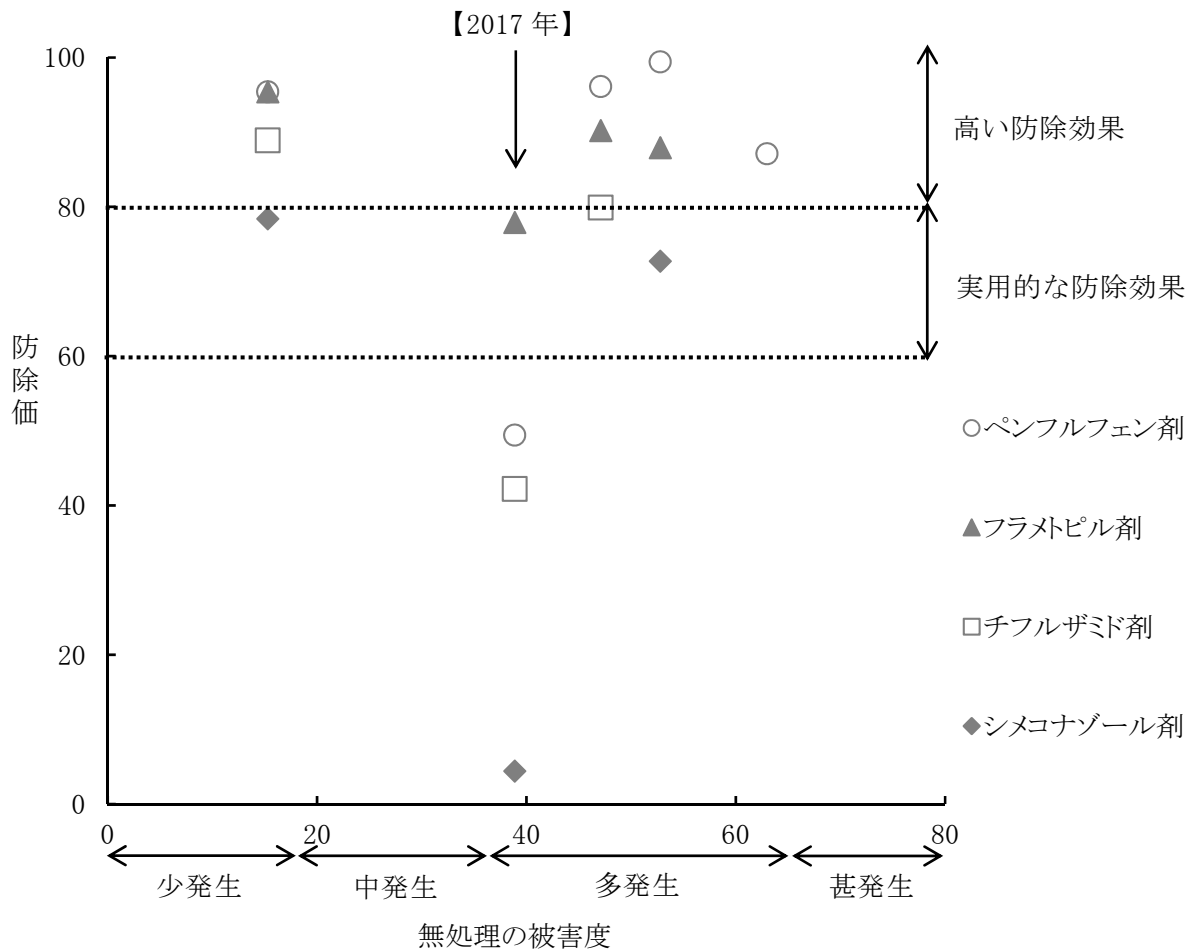


図 1 水稻中生品種における育苗箱施用剤のイネ紋枯病に対する防除効果 (2014~2018 年)

注) 試験場所: 鳥取市橋本 (鳥取県農業試験場)。

品種: 'きぬむすめ'。

移植日: 5 月 19~27 日 (稚苗機械移植、18 箱/10a)。

出穂期: 8 月 13~20 日。

発病調査: 9 月 13~10 月 1 日。

無処理の発病程度 (全体の被害度): 2014 年; 多発生 (63.1)、2015 年; 多発生 (47.1)、2016 年; 少発生 (15.3)、2017 年; 多発生 (38.9)、2018 年; 多発生 (52.8)。

4 試験担当者

環境研究室 研 究 員 宇山啓太

研 究 員 宮本雅之*

室 長 長谷川優

*現 有機・特別栽培研究室 主任研究員